

絶滅危惧昆虫をテーマとした公民館向け簡易展示パックの開発

～住民参加による絶滅危惧昆虫の分布調査をめざして～

福井市自然史博物館学芸員 梅村信哉

〔背景と目的〕

福井県では、2016年春に絶滅のおそれのある野生動植物のリスト（レッドリスト）とその生息状況を取りまとめた冊子（レッドデータブック）の改訂版を発表した。演者は、この改定事業に昆虫部会の副会長として携わり、県内で絶滅のおそれのある昆虫（絶滅危惧昆虫）に関するデータ整理を行うとともに、標本、写真、動画などを収集してきた。この成果に基づき、福井市自然史博物館では2016年3月19日から5月22日に、絶滅危惧昆虫をテーマにした特別展を開催した。特別展開催にあたり、展示解説書も発刊し、生物多様性や野生生物の保全の重要性、福井県の自然環境の変化について普及啓発を行ってきた。

特別展の開催により、普及啓発について一定の成果を挙げることができたが、生物多様性や野生生物の保全に関する一般市民の意識は十分に高いと考えられず、博物館内での普及啓発の充実に加え、博物館外での普及啓発の促進が重要な課題であることを再認識した。

そこで、本研究では、普段博物館に足を運ばないような人にも絶滅危惧昆虫や地域の自然の変化、生物多様性の重要性について関心を持ってもらうことを目的とし、地域活動の拠点となる公民館での使用を想定した展示パックとガイドブックを作製した。また、地域として自然保護活動を推進するきっかけを作るべく、タガメやゲンゴロウのように大型で、識別が容易な種を対象とした、住民参加型の絶滅危惧昆虫の分布調査プログラム作成を試みた。

〔展示パックの作製〕

① 貸出標本

公民館の周辺に見られ、かつ環境が悪化して昆虫の衰亡が問題となっている水辺（水田・湿地・ため池）、里山林（雑木林）、河川・河原、海浜の環境を取り上げ、それぞれに生息する絶滅危惧昆虫の標本を採集した。各絶滅危惧昆虫の解説、福井県内の市町村単位の分布情報、拡大写真、環境省版及び福井県版レッドデータブックのカテゴリー情報を印刷した用紙と標本を環境別にドイツ式標本箱に収めて貸出標本とした（写真1）。

公民館で貸出標本を安全に展示するため、委託業者との打ち合わせの上、低コストで簡便に運ぶことのできる展示台を作製した。

② ガイドブックおよび解説タペストリー

2016年に当館が発行した展示解説書をベースに、「生物多様性とは何か」、「なぜ生物多様性を守る必要があるのか」、「福井県の環境別の絶滅危惧昆虫と環境の変化」について紹介する12頁フルカラーのガイドブック800部を作製した。

実際に公民館などが中心となるで行う自然観察会にも役立ててもらえるよう、ガイドブックには識別しやすい絶滅危惧昆虫（ギフチョウ、タガメ、ゲンゴロウ、ミズスマシなど）を題材とした自然観察のヒントも掲載した。

加えて、ガイドブックの文章をさらに簡略化または図解し、A1サイズの展示解説タペストリー10枚を作製した。

③ 展示パックの公開

2016年10月8日から11月27日の期間に当館のホールにて貸出標本とミニガイドの原稿をパネル化したものを展示した（以下、中間発表）。また、完成した展示パックは、2017年3月18日より5月28日まで当館のホールにて公開している（写真2）。



写真1：貸出標本



写真2：公開中の展示パック

〔住民参加型の絶滅危惧昆虫の分布調査プログラム作成に向けて〕

住民参加型の絶滅危惧昆虫の分布調査プログラムを考案するための基礎情報を得ることを目的とし、中間発表時の来館者を対象にアンケート調査を実施した。タガメ、ゲンゴロウと、それらによく似た昆虫の写真の中から、タガメ、ゲンゴロウを正しく認識できるかを問うとともに、野外でタガメやゲンゴロウを見たことがあるか、見たことがあると回答した人は、いつ頃、どこで見たかを回答してもらった。

この結果、タガメ、ゲンゴロウを正しく認識できた人から、10年以内に福井県内で、しかもあまり調査が行き届いていない地域でタガメやゲンゴロウを見たとの回答を得ることができた。今回は、その後の詳しい聞き取り調査に発展させることはできなかったが、このようなアンケート調査を展示パック巡回時に公民館で行うことで、地区単位でより精度の高い絶滅危惧昆虫の分布情報が得られる可能性がある。

実際に公民館に展示パックを巡回していく際には、アンケート調査のみならず聞き取り調査、展示解説、観察会などを行うなど、住民から情報を得る手段がいくつか考えられる。

今後、積極的に展示パックを巡回することで、地区ごとに生物多様性や自然に関する関心を醸成するとともに、住民が楽しみながら参加できる調査プログラムを作成していきたい。